学校便り　11月号

かけはし

学校 HP　　学校ﾌﾞﾛｸﾞ

薩摩川内市立里小学校　薩摩川内市里町里 1601　TEL 09969-3-2008
発　行　令和６年 11 月 15 日　　責任者　校長　永野 俊也

里周辺海水温
27℃(11/4)

伝統文化の継承 と 読書

読書旬間に寄せて

校長　永野 俊也

今年の秋の大祭は私が住んでいる村西地区が担当で、お宮や相撲の準備など、少しだけお手伝いできる機会を得ました。金曜日は学校勤務のため、昼休にしめ縄つくりなど作業の様子を見学させていただきました。しめ縄を私などよりも先輩の方がさらに年配の大先輩から指導を受け、編んでいく作業を見て、地域の伝統文化はこのように継承されているんだと、感動を覚えました。

また、その時に大先輩方と、里の十五夜行事についてお話しする機会を得ました。「そうそう、村西地区の十五夜は、ここの武家屋敷通りで綱引してたんだよ。」など、里村時代の様子について、興味深い話を伺うことができました。それにしても、**内侍舞**や**直会**、下甑島のトシドンもそうですが、甑島の人々は、観客に媚びることなく、まっすぐに神様と向き合い行事を継承している、その凛とした姿に、かえって惹かれるものを感じます。そうしてこれらはどう継承されるのか？　そういう思いを、11 月の全校朝会で子供たちに投げかけてみたのでした。それからもう一つの話題は、ちょうど旬間に入った読書に関するお話でした。

スウェーデン？　行ってみたい国の話題で知人から、そうお話がありました。北欧かぁ～ノルウェーであれば**グリーグ**、フィンランドであれば**シベリウス**と、音楽専門の私は思い浮かべますが、スウェーデン？との疑問に「ABBA はスウェーデンです。それから **長くつ下のピッピ**も」と回答がありました。長くつ下のピッピ？タイトルだけは知っているけどどんなお話なのだろう？と思い、司書の美姫先生にお願いし、図書室にあった３冊を借りて一気に一晩で読んでみました。

「もうなんて破天荒…、よく言えば天真爛漫???」　サルのニルソンさんを肩に乗せ、金貨のぎっしり詰まったカバンを持って、ごたごた荘に一人で越してきたピッピ（９歳）。隣の家の子供トミーとアニカは、自由気ままなピッピの暮らしに引き込まれていきますが、周りの大人たちは大混乱･･･。

作者のリンドグレーンさんは、肺炎で長く寝込んでいた娘カリンに、「ピッピ・ナガクツシタ（カリンがその場でつくった名前）のお話をして。」と頼まれ、カリンのために即興でピッピのお話を作りました。今大人の私が読むと、ピッピに振り回される、教師や警察ほか多くの大人に「それは、こういう常識にはまらない子供がいたら大変そう･･･」と共感しつつも、トニーやアニカの視点で見てみると、世界七つの海をまたにかけ、次々と話される奇想天外なストーリー。そして、現実社会でも予測不能な生活ぷっり。これは楽しくてしょうがないだろうなぁ～。と、大人と子供の気持ちが行ったり来たり、そしてそれでも憎めないピッピという少女の姿が心に残ります。作者のリンドグレーンさんは、病気の娘を元気づけようと、ピッピを世界一つよい女の子として、ごたごた荘から、やがて世界の海へ（続編は「ピッピ船にのる」「ピッピ南の島へ」です。）話は広がっていきます。母親の子への愛情そんな思いを感じつつ、目の奥に広がるのは、夏の夜、沈まぬ太陽が、ずっと地平線を横に進む**白夜**の世界。そして、それでも弱い光を放つ満天の星空には、幻想的にゆらめき広がる**オーロラ**。そういうスウェーデンの光景が浮かぶのでした。

← 図書室のカウンターに飾られてます。ぜひ、手に取って見てくださいね。

1～4年生の社会科見学

10 月 18 日（金）、１～４年生の社会科見学を実施しました。

今年度は、鹿島サービスセンターにある恐竜博物館の見学と観光船「かのこ」への乗船でした。恐竜博物館では、来年４月の開館に向けた環境整備を行っており、その準備作業を手伝わせていただきました。館の方の説明を聞きながら、一生懸命作業に取り組みました。開館した際は、手伝った場所に名前も掲示されるそうですので、開館後は、ぜひ、御家族で訪れてみてはいかがでしょうか。また、観光船「かのこ」では、鹿島断崖や甑大橋を海の上から眺めました。初めて乗船する子供も多く、船から見る雄大な景色に感動していたようです。

寄贈：齊藤文庫

齊藤公子様から、101 冊の本の寄贈をいただきました。図書室にもコーナーを儲け、並べてあります。子供たちも借りることができるようになっていますので、秋の夜長に、ぜひ親子読書に取り組んでいただければと思います。

12月行事

２日（月）人権旬間（～ 13 日）
４日（水）委員会活動
　　中期ふるコミュ（５・６年）
５日（木）持久走大会
　　学級 PTA　第２回学校保健委員会
１２日（木）かのこゆり号来校
１４日（土）土曜授業・PTA 空き瓶回収
２４日（火）終業式　大掃除
２７日（金）仕事納め

【お礼】学校参観週間

学校参観週間での多数の来校ありがとうございました。授業はもちろんですが、読書集会など多くの方に見ていただき、子供たちも励みになったと思います。

親子の絆コーナー

「親子読書に寄せて」　齊藤 純子さん

我が家では、学校で借りてきた本を就寝前などに読みます。

選んできた本に子どもの興味関心を感じたり、発見や気づきを共有しながら、成長を感じます。

時々、祖父母の家に泊まりに行きますが、祖母も就寝前に、好きな本を 3 冊ずつ読んでくれます。子どもたちにとって、とても大好きな時間です。

今月の付録
カズラタテ　と　南九州の十五夜行事

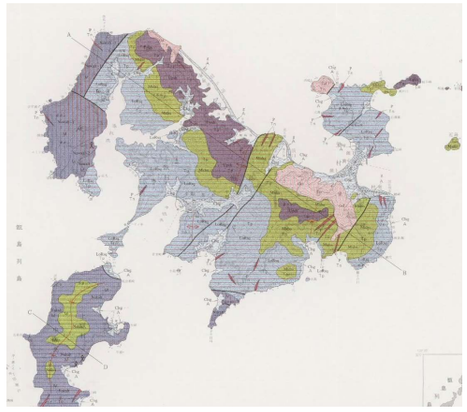
～　里の十五夜関連行事を探る　～　（最終回：後半）

戦後、 里の十五夜行事は、なぜ　カズラタテ　だけが残り現在の形で行われるようになっていったのか？　についての考察

【資料１】

「牟礼山の権現様前から昔は尾岳が見えてた。」と聞き、「えっ、すぐ下の蓑掛浦と小島しか見えてないじゃん…」と思い、甑島に来た１年目に鉈鎌を持って木の枝を払いに行ったことがあります。権現様の祠から一段下がったところがおよそ４畳半ほどのスペースとなっているのは、人工的に石垣を組んで作られているんだと気づいたのはその時でした。今考えると、雨ごいのために、ここで **さっこら踊り** を踊るため昔の人々が組み上げたのだろうと思いました。また、牟礼山の権現様は、戦時中赤紙が届いた人が出征前に弾除け祈願に訪れたとか、目の病を患った人が治癒を祈願しに山に登ったなど、里村の人々にとって身近な信仰の対象であったと話を伺いました。そもそも「権現様」の権とは「臨時の」とか「仮の」という意味があり、「仏」などが「神」の姿として現れたことを指しますが、牟礼山の権現様の由来は、里村郷土史によると不明となっています。（各地に残る山岳信仰の権現様は、ブロッケン現象［背後から指す太陽の光が、霧などに投影した影の周りに虹のような光の輪となって現れる現象］によるものが多いと聞きます。）その牟礼山（岳）ですが、国土地理院発行の地図には、長らく「嶺の山」と誤って標記されていました。国土地理院が調査に来た際、よくわからない人が間違って伝えたものがそのまま使われた？　そうです。さっこら踊りの歌詞中に「～嶺の権現山～」とあるので、そこからの勘違いなのか？と思いました。それを八幡神社の先の宮司**日笠山正治**氏が「三国名勝図絵」等々の資料を国土地理院に直接持ち込み間違いの修正を申請し、現在では古来から伝わる名に戻っています（「故郷懐古」日笠山正治 編著 に詳細は記載されています）。ありがたい話だと思いました。

【資料２】



本題に入ります。**なぜ、十五夜の綱引から里ではカズラタテが独立して現在の祭りの形で行われるようになったのか？**　という問いに関する考察です。

まず、そもそもの話ですが、この祭り、**カズラ綱を使っていなければ成立しません。**　ではなぜ、里だけ（厳密にいうと、規模は違いますがカズラ綱による綱引は、甑島の浦上地区、阿久根の脇本地区でもかつては行われていました。）カズラ綱で綱引をするようになったのか？　そこを解明する必要があります。他の地区は、カズラを芯にして、そこへカヤやワラを編み込むところはありますが、基本カヤで綱を編みます。十五夜の頃はまだ稲の収獲が終わっていないため、稲ワラを使うところでは、綱引の綱を編むためだけに早期米を植えている地区がありました。里でも稲ワラが手に入るのは秋の大祭の頃ですから、十五夜には間に合いません。

ということは、里では**カヤ**より**カズラ**の方が入手しやすかったから？　それよりも里の当時の生活では**カヤが貴重だったからではないか？**

【資料１】の昭和 30 年代の里の光景です。当時は遠見山の山頂までずっとイモの段々畑が続いていますが、そのあぜ道に生えるカヤも棒が立って、「ここからここはうちの！」と所有権が主張されていたと聞きました。当時は、農作業のために牛を買っている家が多く、カヤは牛のご飯として欠かせないばかりか、収納小屋や家の屋根の素材として重宝したはずです。そしてカズラは、森林資源の保全のためには取ったほうが山は喜びますし、着火剤として活用もできるし、クズカズラの汁は、わずかな甘味を味わうこともできます。これらのことから、里ではカズラ綱を使うようになったと思われます。その結果として、普通の綱より丈夫なカズラ綱は、５集落それぞれ山から降ろしてくる際、他集落と競い合い、ぶつけ合ったり、とぐろをを巻いた時に人がその上に乗ったりと、祭りの勇壮な頂点を築くことを可能としました。そうしているうちに綱引よりも、カズラ綱が練り歩く行為自体が独立して独自の発展を遂げることになったのだと思いました。

【資料３】

そして十五夜行事にはおそらくまったく関係なく、里ならではの事情により登場し、祭りとしてのエンターテイメント性を高めるために大いに役立っている、忘れてはならない存在がいます。 です。　**カエル　＝　雨が降ると喜ぶ！**　このことが、里という地域特性を象徴しているのではないか？

牟礼山を村方面から登る際、牧ノ辻段から **雨タモレノダン** 付近まで今では山に帰りつつある昔の段々畑跡を確認することができます。その途中に、唯一の水場跡がありますが、一面段々畑だった頃と違い、表面に木がいっぱい生え水を吸い上げている現在では、水場跡の水は枯れています。「これって、水脈自体が表層を走り、山全体が保水力をそれほど持っていないのではないか？」と考え、【資料２】の国土地理院地質図を検索して見てみました。すると里だけ特徴的な地質が浮かび上がってきました。上甑島では牟礼山から遠目木山にかけて、里村方面だけ、固い花崗岩（図薄ピンクの部分）に覆われていることがわかります。しかも甑島の他集落は、基本湾の奥で季節風の影響をかわし、水が集まり得やすい谷間沿いにあるのに比べ、里村は季節風の通り道で、山に降った雨もすぐに海に流れてしまう地形上にあります。**「これって、もろ日照りに弱い地形じゃん。」**だから里村の先人たちは、段々畑の頂点の広場を**雨タモレノダン**と名づけ、そこで雨ごいの踊り（さっこら踊り）を奉納して、雨が降ることを願った。ですからさっこら踊りも踊られているうちに雨が降り出し、**カエルが喜ぶ** を表現するかのように、退場の際踊り手は、カエルに扮しちょっとコミュカルに退場していきます。

この雨の恵みを呼び込む一連の流れがカズラタテにも組み込まれ、先踊りを**カエル**と呼び、本来大蛇に食べられるカエルが、楽し気に踊るようになった。そして広場でとぐろを巻く大蛇にカエルたちが飛び乗り、天を仰ぎ雨の恵みによる喜びを爆発させる。それは、日照りによる干ばつを吹き飛ばし、村に恵みをもたらす象徴として、里の人々の DNA を呼び覚まし、人々は思い思いに仮装し、化粧をして祭りをより盛り上げるようになっていったのではないか？

カズラタテ について私はこのように考察してみました。　実際のところはどうなのでしょう？　　どうぞご意見をお寄せくださいね。　　［ 完 ］